

観光客情報提供利用と周遊行動特性との関連性分析*

Basic Relationship between information for the use of tourists and their excursion patterns*

山根広嗣**・金 賢***・西井和夫****・佐々木邦明****

By Hirotsugu YAMANE**・Hyun KIM***・Kazuo NISHII****・Kuniaki SASAKI****

1. はじめに

首都圏近辺の観光地では、休日を中心に自動車交通が増加しており、観光地へのアクセス道路や観光地内道路での交通混雑や渋滞が深刻化してきている。これらの問題を解決する手段の一つとして地域 ITS がある。もちろん、交通混雑が需要の集中に対して道路交通サービスの供給量が十分でないことに起因するものであるから、道路整備による絶対的な交通容量の確保が求められる場合が多い。しかしながら、より短期的にしかも効果的な交通流の実現のためには、既存ストックを最大限に活かすソフト対策による観光地交通環境の改善をはかることが重要である。その意味で、観光地における安全・安心・快適な周遊行動のための観光地 ITS への期待は大きいといえる。

わが国の ITS は、これまでは全国レベルの事業（ETC や VICS 等の 9 事業に分類）が先行して行われている。一方、地域 ITS は、地域固有の交通課題の解決、地域間交流拡大、そして地域活性化に対して有効な情報提供施策の一つとして位置付けられている。本研究は、この地域 ITS 構築のための諸検討課題を実証的に検討するものであり、具体的には山梨県富士五湖地域を取上げ、当該地域へ来訪する観光客を対象にその周遊行動特性と情報提供利用特性との関連性を把握することを目的としている。

*キーワード：観光客、情報利用、周遊行動

**学生員、山梨大学大学院医学工学総合教育部

(甲府市武田4-3-11, E-mail: g04mn036@ccn.yamanashi.ac.jp)

***正員、工修、山梨大学大学院医学工学総合教育部

(甲府市武田4-3-11, E-mail: g03de001@ccn.yamanashi.ac.jp)

****正員、工博、山梨大学大学院医学工学総合研究部社会システム

(甲府市武田4-3-11, TEL&FAX: 055-220-8533, E-mail: knishii@ccn.yamanashi.ac.jp)

2. 研究の基本的枠組み

休日・観光交通研究への関心の高まりは、1990年代以降多くの研究者による精力的な研究蓄積を見ても明らかである。とくに、観光地交通計画（森地ら(1998)¹⁾）では、単に交通現象にのみ焦点があるのではなく、観光地（地域）の抱える様々な課題解決と、より魅力的な地域の創造と地域間交流実現を目指すものとしてその方法論の確立が検討されている。こうした背景のもとで観光地における周遊行動分析研究は数多くなされ、多様な観光活動形態における時間的・空間的特性の把握、代表的な周遊行動パターンの類型化、そしてこれらの周遊行動特性に基づく周遊行動モデルが構築・提案されている。

図・1は、従来の周遊行動特性分析の流れに対して、本研究での観光地 ITS の議論を対応づけるべく情報利用特性分析を位置付けたものである。

従来の周遊行動分析との相違点は、観光客の観光地や観光交通関係の情報提供利用が周遊行動パ

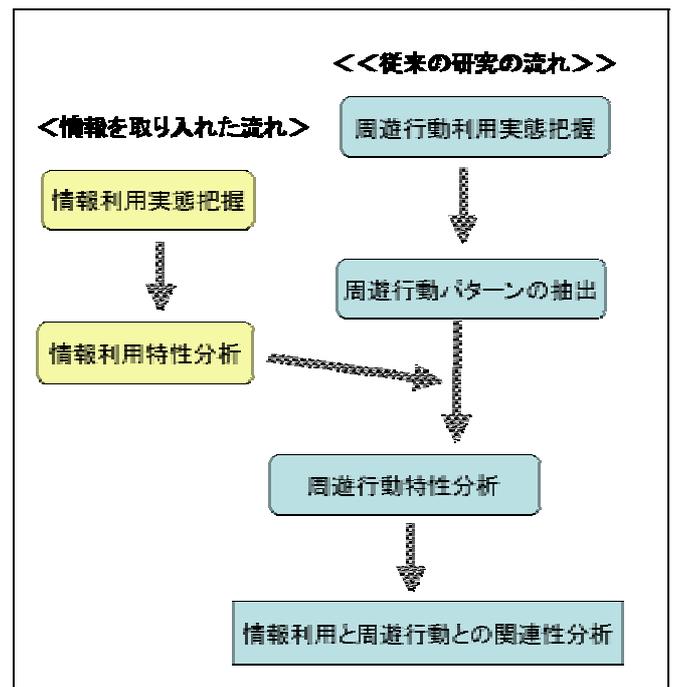
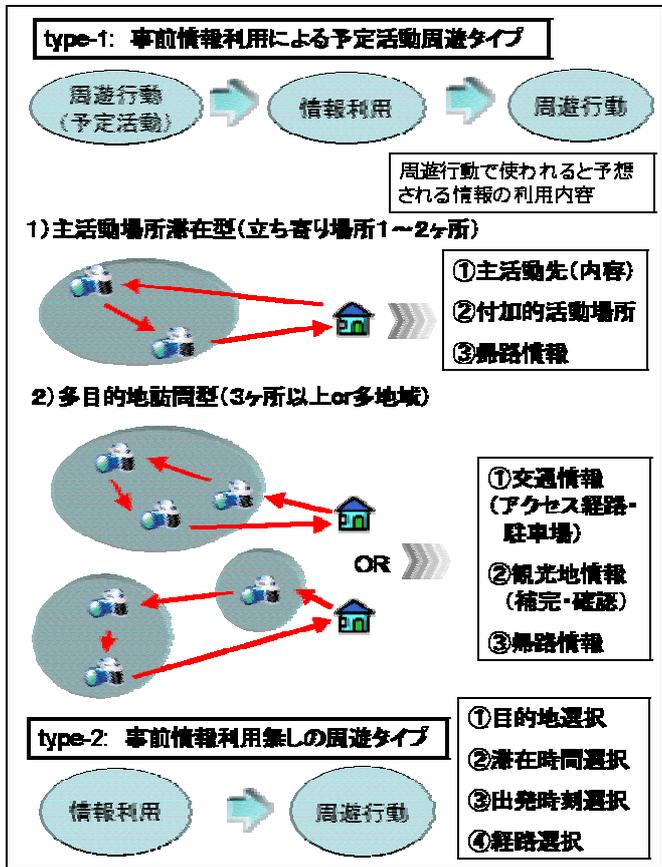


図 1 情報利用と周遊行動との関連分析の流れ

ーンを大きく規定していることを、その意思決定過程の中で明示的に取上げていこうとする点である。

すなわち、周遊行動パターンの形成にかかわる意思決定過程において、観光客（活動主体）は多くの場合、事前のスケジュール段階で周遊行動パターンを予定する際および周遊行動途上でいくつかの情報を取得し利用している。（これは予定活動を前提とするタイプ（type-1）といえる。）一方、観光活動に固有な特性として、このような予定活動（planned activities）を前提とせず、情報提供利用の後に（事後的に）周遊行動パターンが決定づけられる場合（type-2）もある。この2つのタイプにおける情報利用と周遊行動との関連性の把握が重要となる。

そこで図・2に示すように、本分析では、情報利用が周遊行動にどのように関わっているかによって、まず事前の情報利用に基づく予定行動の有無による周遊行動タイプの分類（上述の2タイプ）を前提とする。その上で、予定活動の内容を考慮して周遊行動パターンの分類としては、立ち寄り場所が2箇所までの「主活動場所滞在型」（PPS: planned primary-stop excursion）と、3箇所以上または複数の観光



図・2 本分析の基本的枠組み

地を来訪する「多目的地訪問型」（PMS: planned multi-stop excursion）の2種類に分けることにする。ここで観光客が観光周遊行動の予定を立てる際、何らかの情報を利用した場合は過去の来訪経験に基づく情報取得を含むものと考えている。この場合、周遊行動中に利用した情報は、立てた予定に対しての確認・補完あるいは追加的な目的地に関する情報取得などに利用される場合が多いと考えられる。

さらに、予定活動に関する情報利用を事前に行った観光客に対してPPS型かPMS型に分類すると、それぞれで利用される情報が異なると予想できる。すなわち、PPS型の場合、出発前の事前段階における主活動場所（PS: primary stop）に関する情報、

追加的な立ち寄り先（AS: additional stop）の新規情報取得、そして観光地からの帰路に関する情報の3つの情報が主に利用されると考えられる。一方、PMS型の場合は、多訪問型であるために、アクセス経路・駐車場情報等の交通情報、来訪予定の観光地に関する確認・補完のための情報、そして帰路情報、の3つがよく利用されると考えられる。

今回の論文では、予定段階で情報利用したグループごとに周遊時に利用した情報の特性を分析する。一方、type-2の事前の予定活動を前提としない周遊行動のケースについては、周遊行動中に利用され

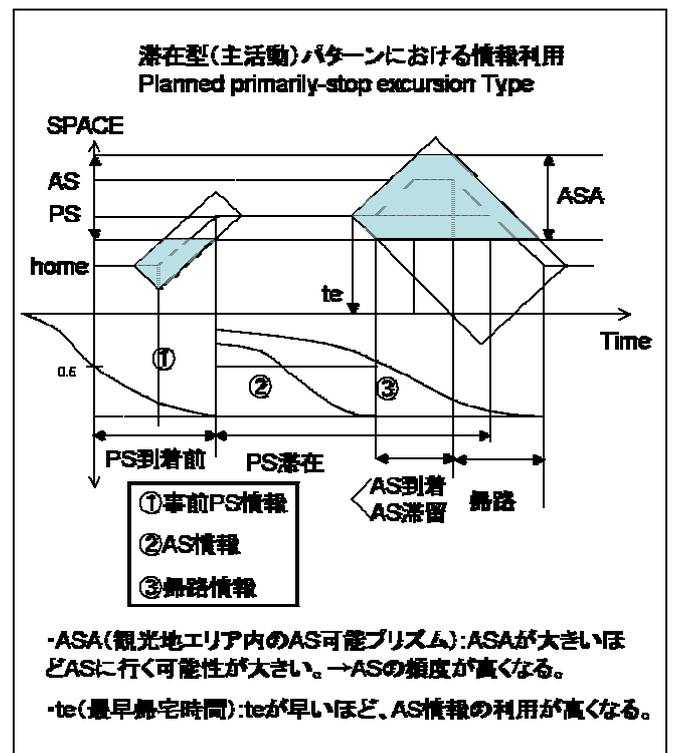


図 - 3 情報利用とSPACE、Time との関係

る情報は、目的地・滞在時間・帰宅時刻などの意思決定に関わるため、情報取得のタイミングによって、結果として周遊行動パターンを決定づけることを意味する。

3. 基礎集計分析

(1) アンケート調査概要

本分析では表-1に示すアンケート調査を用いる。ここで、旅行の予定を立てる際に情報を利用した被験者数は492人で、利用しなかった被験者は119人であった。周遊行動中に情報を利用した被験者数は、404人、利用しなかったのは207人となった。情報取得タイミングはアクセス・イグレス時で246人となり、地域内での情報利用が336人となった。これは全体の6割弱になり、観光客が地域内で情報を得ていることがわかる。

表 1 アンケート調査の概要

調査期間	平成 15 年 10 月 18(土)・19(日)・25(土)・26(日)日の4日間		
調査内容	被験者の属性 周遊行動予定立案時における利用情報内容 当日の周遊行動と周遊中に利用した情報		
調査対象地域	河口湖無料駐車場・山中湖無料駐車場・道の駅なるさわ・河口湖駅 の4箇所		
配布枚数	2088枚		
回収枚数	611枚	回収率(%)	21.14%
配布・回収方法	直接配布、後日郵送回収方式		

(2) 分析結果の紹介

a) セグメント

まず、予定を立てたか立てなかったかのセグメントを行う。ここで被験者は、予定を立てる際に情報を利用しなくても経験で予定を立てることは可能である。これをどう把握するかであるが、今回は来訪頻度が、頻繁でなく(来訪が1年に1回未満)、認知度が低くかつ、事前に情報利用を行わなかった被験者を「予定を立てずに周遊をした」と定義づけた。ここでの認知度とは、自然景勝地、娯楽施設、アウトドア施設、地域内道路、道路の混雑区間を5段階に聞いたもので、認知度が低い1、2をすべて

選択した被験者を選んだ。

次に予定を立てた被験者を、立ち寄り場所が2箇所までの「主活動場所滞在型」と、それ以外の「多目的地訪問型」に分類した。表-2より、予定を立てずに観光をしたのは全体の2%となり、ほとんどの人が予定を立てていたということがわかる。

表-2 事前情報利用と周遊行動の関係

予定を立てた	主活動滞在型	261人	43%
	多目的地訪問型	339人	55%
予定を立てなかった		11人	2%
	合計	611人	100%

b) 当日の利用情報

各グループの周遊行動中に利用した情報の利用内容をみると、予定を立てなかったグループと予定を立てたグループとは利用している情報が異なった。予定を立てたグループが利用した情報はどちらも、自然景観と一般道路情報がよく利用されているのに対し、予定を立てなかったグループは、みやげ・レクリエーション・駐車場の情報利用が目立った。これは、予定を立てたグループと比較して、立ち寄り場所に対する情報が少なかったからとみられる。なお一人当りの情報利用数は表-2の上から順に1.39,2.29,1.09回となった。

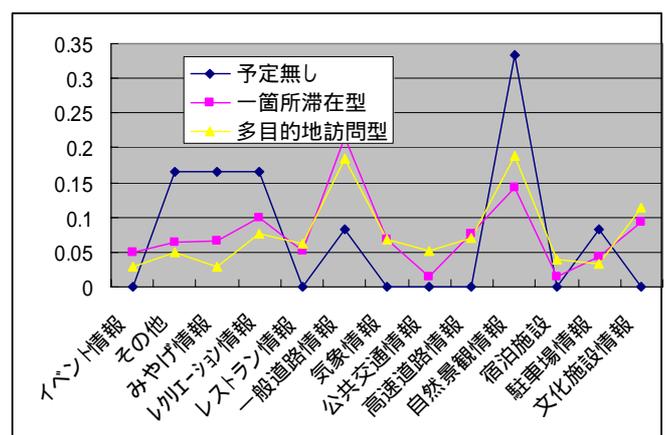


図-4 当日の利用情報内容

c) 帰宅決定時刻

各グループの帰宅決定時刻の分析であるが、予定無しのグループは被験者数が少ないため、図はカットした。予定無しのグループは、決定時刻が、9

時から13時と周遊行動中に満遍なく決められていたのに対し、予定ありのグループ(図5, 6)は約2割弱が予定段階で帰宅時刻を決定していた。主活動場所滞在型と多目的地訪問型をみると、どちらも9時から11時に決定している観光客が多かったが、多目的地滞在型の場合はそれより前、つまり8時前までに決定していた観光客が多かった。これは、主活動滞在型と比べて、活動範囲が広く、それによって、前もって帰宅決定時刻を決めておく必要があったからと考えられる。

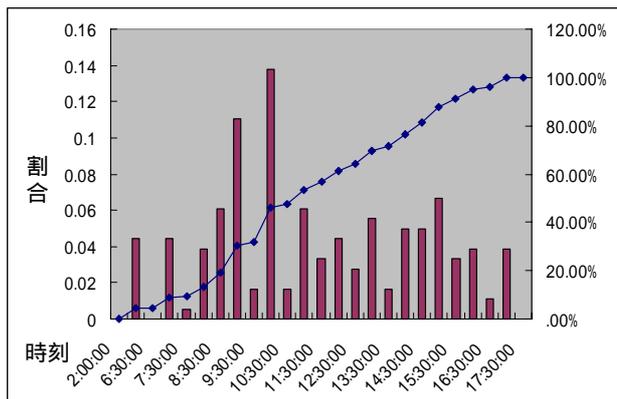


図-5 主活動滞在型における帰宅決定時刻

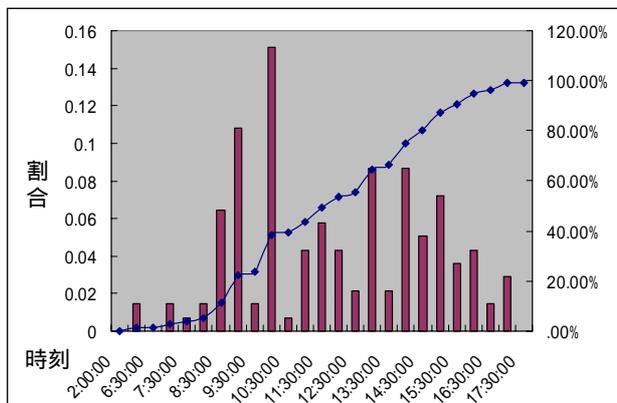


図-6 多目的地訪問型における帰宅決定時刻

5. おわりに

これまで、観光地における情報利用実態から観光周遊行動パターンに違いがあるのかを着目して分析してきた。今回の分析から、以下の傾向があきらかになった。

- 1) セグメントをした結果、予定活動を行っていた観光客は全体の98%となり、予定を立てずに周遊をする被験者はほとんどいなかった。
- 2) 当日の周遊行動中に利用した情報は予定を立てたグループに対し、立てなかったグループは、立ち寄り場所に関する情報(みやげ・レクリエーション・駐車情報)が乏しく、これらの情報の利用が目立った。
- 3) 各グループの帰宅決定時刻の分析では、予定無しグループは周遊中に満遍なく決定しているが、予定ありグループでは、9~11時が多かった。また、多目的地訪問型は出発前の段階から決定している人数も多く、活動範囲が広くなることによって、帰宅時刻を前もって決定する傾向がつかめた。

今後の展開として、図-3に挙げた情報利用とSPACE、Timeとの関係を調べ、各グループの時空間プリズムを求め、分析する考えである。

参考文献

- 1) 森地 茂, 兵藤哲郎, 岡本直久: 時間軸を考慮した観光周遊行動に関する研究, 土木計画学研究論文集 p63-70.